

橋詰静子著『透谷詩考』

佐藤 泰正

いささかラフなスケッチから始めてみたい。橋詰さんの透谷論についてはかねて注目し、また紹介とともにいささかの疑義を呈したこともある。これはまたあとでふれるが、しかしいま、この透谷論一巻を読み終って、ある深い感銘がある。と同時に、いくばくかの疑問もまたないわけではない、恐らくこの正負両面についてふれることになるわけだが、先ずその正とは何か。

これはその題名通り透谷全詩についての研究、解説であり、第一部「全詩の構造・意味・統一的解釈」と第二部「本文批評」から成る。あえて言えば、読者は先ず第二部終章（本文確定のために）から読み始めてみるという。橋詰さんの仕事の基底は「本文批評」の徹底にある。この終章ではその道筋への開眼の経緯が語られる。作品を「読む」とはすぐれて主体的な行為であり、「本文批評」とは「客観的な操作」に過ぎぬという迷霧が、勝本版『透谷全集』を読み直すことでみごとに打ち破られたという。この近代文学研究における本文校訂の「金字塔」ともみられた素朴な印象がこわされ、多くの疑問が湧いて来た。ここから改めて作品解説という主体的作業と本文確定という客観的営みの「生きた接合点」こそが抛るべき研究の初源の一点とみえて来たとい

う。

こうして「本文校訂」と「個別作品分析」という「二段構え」の作業が続き、後者は第一部に、前者は第二部にいうことになるが、「あとがき」にもあるごとく、さらにその基底となる第三部「資料篇」の収録はここでは割愛される。この第三部の核心は「筆者版『透谷全集』作成の第一階梯として『透谷詩集』の批判的本文確定による本文づくりであり、「更にこれを発展させた自立語・付属語の『透谷用語索引』、（『透谷法総索引』）、「固有名詞総覧」などであるが、すでに「人名索引」や「透谷詩対校表」などは発表済みであり、「用語索引」の発表が残るという。恐らくこのような細密な作業を基底としてこの『透谷詩考』一巻はあり、研究者としての橋詰さんの真骨頂も先ずこのあたりにあると思われる。

たとえば末尾に収められた第二章「『ドソーフ』の場合」なる一篇なども、この緻密な作業と読みのなから生まれた卓抜な指摘というべきであらう。「ドソーフ」とは初期の評論『時勢に感あり』の文中、従来不明のものとして扱われた言葉だが、橋詰さんはこれを「ドワーフ (Dwarf・小人)」の誤植とみる。当代の世情人心の頹落を鋭く衝きつつ、かくして「日に月にドソーフたらん傾きあり、日に月に支離滅裂せんとするの思ひあり」という。これをこの初期評論の「定稿と推定」する『慈善事業の進歩を望む』の文中、「願はくは社界をして此の温情によりて文明の進路を過たざらしめよ。多難なる邦家をして小人国とならしむるな」という文脈と重ねての指摘だが、これもその細密な本文改訂

第二章第一章『透谷全集』校訂上の諸問題——『楚囚之詩』・

『蓬萊曲』、勝本本——初出本の校合覚え書き——」については、

さて、以上の基礎作業をふまえての透谷詩の読みだが、これに

つては若干の疑義なきをえない。第一部は「全詩の構造・意味・統一の解釈」と題して『楚囚之詩』以下の全詩篇が取り上げられるが、定義通りこれを「全詩の構造」とし、「統一の解釈」を試みるとするところにこの論者独自の目途がある。しかし詩人における全作品の「構造」とは何か。その「統一の解釈」なるものの可能性とは何かが問われねばなるまい。

先ず『楚囚之詩』だが、続く『蓬萊曲』論とともに最も力のこもったものであり、従来の批判からこの詩篇を救拔せんとする著者の意図は、その細部のこまやかな読みとともに随所に新見を早見する。ひとつは韻律の問題だが、著者は細部にわたってその自由律の試みを検討する。その近代的自我の「悩みを尖鋭に造型する

次には「主題分析」の問題だが、著者はここに政治的状況論な

らぬ、詩人誕生のドラマを見ようとする。その主想の展開、主体の内的苦悩をめぐる分析は各連にわたってまことに周到だが、しかしこれを『へ楚囚』の苦悩のなかにも望郷の想いに耐えつつ、ついには「神の恵みまたは運命との思わざる和解」に至る物語と見、終末の鶯は「再び美妙の調べを、衆に聞かせたり」の一句に寄せて、「ここに『自由・高尚・美妙』の三者は合体し、民権政治家透谷は、『高尚』を経て『衆』に聞かせる『美妙の調べ』をおのれの短い生涯の責務とする必然性を抱んだのである」という結語はいささか安易に過ぎまいか。むしろこの最終節は作中最も「出来の悪いスタンザ」であり、ここに「モチイフの名にあたいするもの」を認めることはできない」（桶谷秀昭『北村透谷』）という評者の指摘の領ねるところであり、この欠落をこそ問うべきであらう。これはまた冒頭の一句の問題とも無縁ではない。

「會つて誤つて法を破り」という時、これを「政治的後退とみる説」もあるが、「後退」どころか、ここには「法の側から見る」と誤りであつた。『くらしいの意味しか』与えられていず、そこに

一片の悔恨や苦悩の痕もみることとはできぬという。しかし果たしてそうか。むしろここには透谷自身のいう同志との「別後の苦獄」と盟友大矢正夫の獄中体験を重ね合わせんとする作者内奥の機微が託され、第三節冒頭に「獄舎！ つたなくも余が迷入れる獄舎は、二重の壁にて世界と隔たれり」という時、「二重の壁」という詩句が殆ど無意識裡に含む疎外の様相は深い。この、ある根源なるもの、あるいは無垢なる初源の場よりの逸脱の意識こそ、冒頭の「誤つて」の一句が意識裡、また無意識裡に含意するところのものである。言わばこの冒頭の一句をどうくぐるかが、この詩篇の主旨を掴む試金石ではないのか。著者はこれを政治的狀況論から切りはなそうとして、却って浅く読みとることにしてはいないか。これは言わばその内的文脈をどう読みとるかという、詩篇の解説が我々にしるたえざるアポリアともいえるべきものだが、これはまた次の『蓬萊曲』にもつながる。

『蓬萊曲』論は集中、『楚囚之詩』論とともに最も力のこもったものであり、独自の考察がみられる。特にこの劇詩を「複式夢幻能」の構成になぞらえ、また蓬萊山中に分け入る主人公の姿に「己れの深層心理を段階的に明らめ、イド（原始的自我）を極めようとする不退転の姿」を見、蓬萊山こそは外界ならぬ「自我の涯底ない深層に倒立するデーモンの山」とみる。また作中の「露姫願望」は「ギリシャ神話『オルペウス』の道行と類似の発想」を示すという。これらの見立てはまことに魅力的であり、これに伴なう作中場面の分析もこまやかにして充分の説得力を持つ。

ただここでも著者はこの見立て自体の枠にいささか囚われすぎ

てはいまいか。別篇「慈航湖」を加えての二部構造を複式夢幻能と見立て、「別篇の〈超越性〉は形式的及び思想的必然性に基つき『蓬萊曲』全篇のクライマックスを形成するもの」だというのが、果たしてそうか。すでに評家も指摘するごとく、そこにはクライマックスならぬ、発想、文体のまがうべくもない衰弱がみられる。「富士の高峰」云々という「常套的な修辭」の展開は、詩的言語の孕む「仮構の意志」を喪失し、「ことばは仮装の上を走っている」（北川透）というほかはあるまい。これはまた『楚囚之詩』の終連の問題ともつながる。透谷がこれを上梓直前に截断しようとしたこと、また『蓬萊曲』別篇を草せんとして簡略なる未定稿に終ったという事実は、やはり閑視できない。

以下、著者はこの両詩篇を軸に最終詩篇『露のいのち』に至る迄、全詩篇の展開を克明に辿ってゆく。蝶の連詩、相互の比較検討や『みどりご』『彈琴』『彈琴と嬰兒』三篇の内的連関の分析など随所に見るべき創見もあり、詩人としての脱皮、進展のあとが終末詩篇にみる「個の寂滅の充足の境」に至る内的熟成とともに明細に分析される。その整のあととはたゆまず、彫りも深い。しかしまた敢ていえば、論の展開が、また各詩篇の伸展、連関の跡づけが、しばしば整合に過ぎるともみえる。

ここではじめの問いに還ることとなるが、「統一的理解」とは何か。またその全作品の「構造」を問うとは、逆に安易な「統一的理解」を許さぬところに「構造」の形姿もまたゆるやかに現われ出て来るものではないのか。橋詰さんの仕事は透谷に始まり藤村以下、近代詩の通時的展開へと向かうかとみえるが、近代詩そ

のものの内包する「構造」の意味を、その形姿を問う、方法論自体が改めて新たな課題となるであらう。とまれ、この意欲的な出発の第一歩に対して、心からの祝意とともにまたいささかの苦言

を呈したが、そのさらなる熟成を心から祈ってやまないものである。

(昭61・10 国文社刊 四六判 三一〇頁 二八〇〇円)

新刊紹介

国東文麿編

『中世説話とその周辺』

本書は、國東文麿先生の古稀を祝おうとする三十一名の人々により編まれた問題意識豊かな論文集である。然も、この三十一は、巻頭論文『宇治大納言物語』と平中話』を寄せられた先生御自身をも含み込む勘定なのだから、何やら不思議で楽しい。内容的には、『今昔物語集』に関わる九本の論稿を始めとして、『日本霊異記』・『三宝絵』・『古本説話集』・『大鏡』・『俊賴髓』・『貴族日記』・『発心集』・『撰集抄』・『古今著聞集』・藤原信実等の人物研究と汎く対象が求められたばかりか、『保元』・『平治』・『平家』・『曾我』・落城譚等について

の七本の軍記物研究、さらには二本の能研究といった具合になっていて、本書を一過するならば、正に「中世説話とその周辺」を一渉散策する知的喜びを味わうことができるはずである。

(昭和62・12 明治書院 A5判 五〇一頁 八八〇〇円) [刑部 久]

森田良行著

『日本語をみかく小辞典(名詞篇)』

『基礎日本語』(角川書店)等で日本語の基本語彙の意味分析を試みてきた著者の書き下ろしの本である。本書は、日本語は「和語に漢語や外来語が加わって、実に多彩な語彙体系を生み出している」のに、その豊かさを生かせる人が少なくなっているという現状に対して、主として和語を体系

化することによって、日本語への見直しを提唱するものである。全体はⅠ人間・社会Ⅱ身体・感覚、Ⅲ天地・自然、Ⅳ時間・位置、Ⅴ思考・人生の五項目から成り、日本人が身近な世界を言葉によってどのように切り分け、取り出している(た)かに重点が置かれている。『基礎日本語』が一語の基本義と派生義を記述する形だったのに対し、本書は一テーマの中の語のグループの意味用法を従来の類義語の分析に加え、語源からの通時的な視点も加えて分析している。絵や表等視覚的な面での説明が無いのは惜しまれるが、日本語の意味への探求心を大いに刺激する本である。

(昭62・10 講談社 新書版 二四二頁 五三〇円) [齊藤深雪]